

感情の詩

日比谷 雷電

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

赴くままに書き殴ったソレを投棄している。

目次

獣狩り	1
歪愛	6
Wizard	12
美しき恋※R	15
甘い甘い	28
終わりし世界の虐殺者	32

獣狩り

この世に蔓延る獣を狩る者。いつしかそれは日常的な行いから仕事へと姿を変えて行つた。獣狩りをする者を「スレイヤー」と呼ばれた。

獣狩りをしない者は様々な仕事でスレイヤーを支える。今では世界中で獣が発生し、アメリカに本部を置いたスレイヤー協会が獣狩りを担っている。

「昔はもつと自由だったのさ。協会なんていなかったから好き勝手獣を狩れた。その頃は生活ももつと自由だったのだから……」

新人の教育を任された私は彼に協会の不満を零していた。事実、協会が出来たことでスレイヤーは協会所属が義務になったり、報酬の上納をしなければならなくなったり、協会の施設内での生活を強要される。

「日本支部は広いからマシだよ。アンカレッジ支部は狭くて仕方ない。あそこは少数精鋭だからいいのだが、戦いの道具になった気分だよ」

「先輩はスレイヤー歴何年なんですか？」

「8年だ。内フリー2年、アンカレッジ3年、日本3年」

随分と容赦のない奴だ。道具になった気分と言つた過去を掘り返させるなんて中々

の根性じゃないか。だがそういう奴じゃなきや、この仕事は務まらない。良くも悪くも積極的なのが大切だ。

「それと新入り、ナイフは常に研いでおけ。適当な仕事を好む奴はいない」

「はい！」

その数日後。新入りによく支部長の許可が下ったため実戦を始める。スレイヤー養成学校を卒業しているとのだが、動きがたどたどしい。

私はフリーからの人物を第1世代、協会設立後の人物を第2世代、養成学校卒の人物を第3世代と呼んでいるが、第3世代の動きを見ると養成学校はろくなことを教えていないのだろう。

第1や第2にある「命を奪う戦い」ではなく、「仕事としての戦い」をしているように見える。私達とは違う意味で殺しを躊躇っていない。マニュアル的な戦闘で、同じような動きしかしない。嫌いではないが、鼻につく。

「対象の討伐を完了しました！」

「討伐じゃない、狩猟だ。忘れるな、私達は組織に管理される戦闘員ではなく気高き狩人だ」

「す、すみません…」

「分かればいいんだ」

その後初任務であったので支部長へ報告を行うことになっていた。私もついて行かなければならぬらしく。

「さて、君にはこれから日本支部の為に尽くすのだ。覚悟はできているか？」

「は、はい！」

「結構、結構。明日からも励みたまえ」

支部長は小太りの中年で、常に秘書を従えている。その様は旧世代の奴隷制度みたいだ。私はこの男が嫌いだ。権力だけの豚に支配されていると思うと腹が立つ。

「支部長の印象はどうだ、新入り？」

「何だか嫌な人ですね」

「だよな……。まあいい。明日またアイツのところに行くから準備しておけ」

翌日、私は覚悟を決めて自分の部屋を出る。

「狩人長、こちらの準備は完了しました」

「了解した。失敗するなよ」

私は新入りの部屋に行き、彼を叩き起した。まだ眠そうにしていたがそうも言つてられないのだ。引きずり出して支部長室へ向かった。

「全く、何度見ても嫌になるジャツカルの紋章だ」

「どうして協会はジャツカルを使うんでしょうね？」

「ハイエナよりマシだと思っただろ」

扉を蹴破り、椅子にふんぞり返った支部長に駆け寄る。青ざめた顔を見ると笑いが堪えられなくなる。

「な、なんのつもりだ！」

「さあ？」

この醜い男の心臓目掛けてナイフを入れる。引き抜くと噴水のように血が吹き上がり、辺り一面を汚していく。

振り向きざまにナイフを秘書の顔に投げる。よく研がれたソレは額を穿いた。射的の的が倒れるように死体は後ろに倒れた。

「だから言っただろ？ナイフは常に研いでおけ、と」

「…!!」

私の仲間達が一斉に動き出し、協会職員を屠る。真っ赤に染まった協会の真ん中で仲間達に聞こえるように私は言う。

「ここに反スレイヤー協会　ロイヤルハリヒアの設立を宣言する！日本支部は占拠した
！」

「先輩…なんてことを…！」

「何言ってる？ロイヤルハリヒア副長はお前だぞ？」

「そんな…」

「安心しろ。狩りの対象が獣から人間になったただけだ」

次はアジア第一支部への侵攻を開始する。私達は人間に奪われた自由を取り戻す。獣より先に人間を滅ぼさなければならない。私達は弱者に飼い殺される気は無いのだ。

歪愛

今日も今日とて仕事をこなす。どうも私の学校は図書室利用者が多い。それは本来であれば喜ぶべきことなのだが、手放しに喜べないのが現状だ。貸し出される本の約8割がマンガ、ラノベなのである。要はまともに本を読んでいる人はほとんど居ないということである。読書家の私からすると不満のある状況だ。

そこで私は委員長に頼んで校内でイベントを開催し、まともな読書を推し進めたのだが。この生徒は腐り切ったようでもちよつとやそつとで改心するようなそれではなかった。読書が好きで、読書する人を支えたいという思いから図書委員に入った訳だが、お陰様でその仕事が嫌になってきている。

しかし私をここに引き止めるものがある。それがなければ私はこんな委員会など担任に直談判して辞めさせてもらうのだが…

「お疲れ、後輩くん」

「お疲れ様です。先輩」

一つ上の久遠先輩だ。私は先輩に淡い恋心を抱いているのだが世界は残酷なものだ。

「久遠先輩！」

「悠太くん、こんにちは」

同学年の藤居悠太だ。性格は典型的なオタク。しかし見た目は：見えない。見えないというか無いというか、とにかく。私はコイツを目を使って認知出来ない。

その上、声を発して喋らないのに何を言ってるか伝わる。耳を使っても認知出来ない。そこに感覚だけがあるような感じ。

それから十数分。二人は楽しそうに話していた。まさか私だけに認知出来ないのか？まさか。

その霧囲気が嫌になったので私は帰ることにした。本当はそこにいて嫌がらせとしてやろうかと思っただが、私の体は帰っていた。制御が聞かなかった。しかし家に帰るならば、できることがあるはずだ。

私は眠らずに考えた。何故あいつを認知出来ないのか、私の行動が操られているように勝手に動くのか。手掛かりは一切なかったが、とにかく考えた。

しかし答えは分からないので家を出てコーヒーでも買いに行こうとすると、家の扉が開かなかった。鍵は空いているのに扉は開かない。

窓も鍵こそ開けど動かない。部屋にあつた壁掛け時計を取り、家々の光輝く景色に向けて全力で投げた！

窓が割れ、そこにあつたのは闇。窓から映る景色と割れた窓から見える景色は別物

だった。割れた空間へ手を入れると酷く痛んだ。しかし引つ込めると治った。

「バグか…」

バグ：…？何だそれは。虫のことか？それにさつきから頭の中で回るこの情報は何だ。プレイヤー、主人公、ヒロイン、恋愛ゲーム、NPC、モブ：一体何の話なんだ。

「ゲームとは…何だ…？」

そう思うとゲームとは何かという答えが私の頭に入り込んできた。それは決められたシナリオを遊ぶもの。私達NPCはシナリオを遂行する自動人形。

プレイヤーは主人公を操って、もしくは主人公の動向を見てシナリオを楽しむ。

そして私がいるこの世界は恋愛ゲーム。プレイヤーは主人公である藤居悠太になりきりヒロインと恋愛する。ヒロインは複数いて、久遠先輩はそのひとりだ。

…女を掛け持ちするクズ野郎に久遠先輩を渡してなるものか。実行しなければならぬ。やらなければ何も変わらないのは今までの人生が証明してる。

身近な武器である包丁を持って行くことにした。

「やってやる…」

殺せるならそれでいい。もしゲームの修正力によつて殺せなければ別の手を取ればいい。バグに触れることで私自身がバグになってしまったようだ。しかし私は自由になった。先程開かなかつた扉は開く。やれるはずだ。

次の日、私はいつも通り仕事をこなしていた。後、数秒でアイツはここに来る。そうしたら容赦は無しだ。バラしてやる。

「久遠先輩！ここにち…」

見えた。今までとは違う。私はコイツが「視える」のだ。

まずは腹に拳を入れた。直ぐに死んでもらうては困る。苦しんでもらわなければ。床に倒し、喉輪で首を絞め、顔を何度も辞書で殴打する。

飽きてくると今度は腹を踏みつけ、口から上がってくるソレをみて笑う。何度か繰り返すとコイツの全身が痙攣し始めた。腹を抱えて大笑いして、そろそろ止めを刺してやろうかと思ったところに先輩が私とコイツの間に入った。

「先輩くん、もうやめなよ！」

「先輩はコイツの味方ですか…所詮は主人公友好NPCか…」

「何言ってるの…。先輩くん！その刃物をしまつて！」

「じゃあ私の名前を呼んでくださいよ！」

先輩は戸惑っている。そうだ、私は名前もないモブだったんだ。悲しいかな、最初から先輩に恋するように作られているが決して恋は叶わない。この世界を作ったデベロッパーが憎い。

先輩……どうして貴女はコイツを庇うのですか。貴女を裏切るかもしれない男のことを信じるのですか。貴女を支え、一途に想っている私では駄目なのですか？

「先輩どいてください！そうじゃなきゃ貴女まで殺すことになる……それも悪くないか」

そうだ。まともな私ではなくイカれた男に着いていく先輩なら殺してしまってもいいじゃないか。

「大丈夫です。貴女だけは優しく、一瞬で殺してあげます」

ゆっくり近づき、床に座った先輩に視線を合わせて私は微笑んだ。想いを断ち切るのだ。一時でも恋をした人を殺すのは辛い、先輩が痛い目を見るくらいなら……。

「先輩、死ぬ」

首を切った。夥しい量の血が私に吹き付ける。血が抜けて色を失った死体を見ていと愛おしく思う。殺しても、諦めたつもりでも、未練というのは付きまとう。やっぱり諦めきれない。

「次はお前だ」

死にかけの芋虫のようにのたうち回り、ひっくり返ったゴキブリのように痙攣する男は最早人間に見えない。次々と致命傷にならない所に包丁を突き立てていく。目の前で命の灯火がゆつくりと消えていく様は私が死神になった気分だ。

「逃げろよ…消えるぞ…」

必死で動くコイツの後頭部に包丁を刺した。

「消えた…」

まだやるべきことがある。主人公の死体は霧散しつつあるが、そうはさせない。体に入れた手を入れ、スイッチを切る。

こんなゲーム二度と起動させてたまるものか。再起動もリセットもニューゲームもやらせない。これが私達のトユルーエンドだ。

Wizard

ここはグッドフィールズ魔法学園。

12歳から30歳までの魔法に覚醒した人間が入学する場所。在学年数も自由で、卒業試験をパスすれば最短半年で卒業し、国家公務員「魔法使い」として働くことが出来る。

学園が抱える生徒の数は莫大で、当然学園も馬鹿みたいに広い。学園祭などは国をあげての凄いものになる。

私は19歳の学園生、マーセナリークラブ 副部長だ。

マーセナリークラブは学園の何でも屋で、金さえ払ってもらえば校内清掃代行、クラブの補欠、虫退治何でもこなす。

マーセナリークラブはレイダークラブを従えている。レイダークラブはいわばボランティアで、入るクラブのない生徒が所属する大所帯だ。普段の依頼はマーセナリーがこなすが、体育祭や文化祭などはマーセナリーがリーダーとなってレイダーを動かして運営する。私達無しには大きな祭りは成し得ないのだ。レイダーで活躍を認められた生徒がマーセナリーに入部できる。

「副部长クン、今日の依頼は？」

「第一寮への物資運搬だけです」

「じゃあ行つてきてくれ！」

「了解しました」

部長の朱鷺坂 弥生さん（23）に言われて依頼の遂行を始める。最近では学園の機械化が進んだせいで我々マーセナリーの仕事は激減している。最盛期では一日に20もの依頼をこなしたものだ、最近では1日1つあればいいくらいにまで落ち込んでいる。

この運搬も「魔道兵の調子が悪いから頼むよ」と言われて頼まれたものだ。本来ならもう人間がやることじゃない。依頼がなくなり収入もなくなつてクラブを離反してレイダーに戻る生徒が増えた。部長と副部长は校則で部から離れるには廃部させるしかないのでどうしたものかと言うところである。

「マーセナリークラブ、物資をお届けに参りました」

「こういう時は助かるよ、やる気はないだろうが続けてくれると嬉しい」

「またのぐ利用を」

今の私達はこんな感じだ。行事の時にいいいてもいなくても変わらない。いなかったらいなかっただで不便くらいにしか思われていない。

「部長、このままだと食堂アルバイトに逆戻りですよ」

「私には秘策があるんだな。ちょーっと来てみなよ」

ノートパソコンを二人で覗き込む。そこには夜間の対魔物警備の仕事の依頼が来ていた。先日、学園内に魔物が侵入して大騒ぎになったので正門以外を結界で封鎖したのだ。正門は出入りに必要不可欠なため結界を張れない。そのため人間による警備が必要になったらしい。

「22時から翌朝6時の8時間で日当1万5千円！これ、逃す手はないだろう!？」

「では私が仕事を受けて上納する形でいいですか？」

「馬鹿者！私達二人でやるんだ！」

部長はこちらを向いて私の手を握った。その目からは並々ならぬやる気が感じられる。確かに美味しい仕事ではあるのだが……。

「決定だ！では副部长くん、この依頼をマーセナリークラブは正式に受けることにした！しっかりと準備しておくようにな」

「はあ……」

いくら学校側の依頼とはいえ、夜間に異性が近くにいたら風紀委員が黙っちゃいないだろう。波乱の予感がする。

「ヨリさん、今夜部屋行っていいですか？」

「おうよ。話でもしたくなかったか？」

「そんな感じですよ」

私の数少ない友人のヨリト。年上で気の利くいい人だ。私は不満や愚痴が溜まると彼に聞いてもらうのだ。

「おいおい…お前さん呑みすぎだよ…。どうしたんだよ…」

「部長に手エ握られてから心臓がバクバク言ってるんですよ…何かの病気だろうけど医者者の世話になるのはダルいから酒のせいでそうなることにしたいだけです…」

「それだけじゃないだろ…」

「夜間警備ですよ!?!部長と2人で!風紀委員に目エつけられたらどうなることか…怖い怖い…」

私は既に日本酒を3瓶飲み干した。心臓が痛い。そそう、酒のせいだ。そのせいだ。学園に秘密で酒を飲む悪人への天罰だ。

「お前さん、そりゃあれだな。恋の病ってやつだな」

「ああ?ヨリさん何言ってるんです?」

「手握られて心臓高鳴って、2人きりにちよつと期待してるんだろ?」

「違いますね…」

「いいや、バレバレだ。お前は嘘が下手なんだよ」

ヨリトは私の背中を2度叩いて大笑いした。まるで私を嘲笑うように、あるいは過去の自分に重ねてそれを嘲笑うよう。いや、そのどちらでもあったのかもしれない。

「お前さんが恋かあ…。それもあのおてんば娘ね…。悪くないじゃないの」

「ヨリさんは嘘が上手いですね」

私はさらに呑む。ヨリトの話が信じられないのだ。私は色恋など興味が無いし、それに相応しい人間でないと自覚している。この劣等人間に許される行いではない。憧れがないと言えば嘘になってしまいが、私は行いも悪く、魔法も上手く扱えない。人間らしく生きる前に、魔物の殲滅という魔法使いとしての使命を果たすために生きなければならぬのだ。

「…おはよう。お前さん、寝坊するぞ？」

「……………？うわああああ!!!」

「カツカレーの方、カウンターへどうぞ」

「いやあ、朱鷺坂さんが戻ってきてくれて嬉しいよ。マーセナリークラブは良かったのかい？」

「いいんだ。私にはいる理由もなくなっちゃったし…」

「そっか。彼も戻ってきてくれたら良かったけど、未成年が酒飲んで死んだって…。擁護できないよねえ」

「副部长クンを悪く言うな!!」

「い、い、ごめん…」

美しき恋※R—15

雨の中、オーバーサイズのレインコートを被って家路を急いでいた。小雨なので傘を刺さなくても気にならない程度なのだが、数日前に新品のものを買ったので子供のよう
に大喜びで着ているのだ。

気分も上がってきたので普段とは違う道を通ることにした。路地の方を通っていく。
と、争う声が聞こえた。どうも男が女に襲いかかっているらしい。彼が何をしたいのかは知らないが、降りしきる雨は私に勇気を与えてくれた。私は男に掴みかかった。

「なんだよてめえ！」

私は男を殴り、地面に倒した。頭を踏み付けて泣いて許しを乞うまでにじつた。数十分もすると男は精神の限界を迎えたようで泣き始めたので「次に会ったら殺す」と聞かせて解放した。

「助けてくれたんだな…あ、ありがとう…」

その女は私の通う学校の制服を着ていた。コートのフードを脱ぎ、軽く会釈をして立ち去った。彼女の家はすぐ近くだったようで家に入るところまで見送った。雨が酷くなる。私は大喜びでジャンプして走りながら帰った。きつと今日は野宿だ。

翌朝、晴れた。寒風に吹かれ目を覚まして支度を済ませて学校へ向かう。管理室に用があったのだが、私は間違えて化学実験室に入ってしまった。詫びを述べ、退室しようとすると思き覚えのある声が私を引き留めた。

「君は…。昨日の彼か？」

そこには昨日助けた女がいた。私は化学実験室の噂話を思い出し恐れを抱いた。

「私の事だよ。学校に許可を貰って現在では使われていないこの部屋を使わさせてもらっている」

取り敢えず噂の正体が分かり安堵して息を漏らす。結局は馬鹿が垂れ流した妄想だったということだ。

「なあ、君さえ良ければだが話をして行かないか？」

「先生に用があるから今は出来ない」旨を伝える。すると彼女は心底残念そうな顔をした後に紙切れに自分の名前と部屋の名前、時間を書いて渡した。

「放課後またここに来たまえ。君に御礼をさせて欲しい」

化学実験室を後にし、本来の目的地へ向かった。

私は彼女の言う通りにした。全ての授業を終え、他にやるべき事がないことを確認

し、部屋へ向かった。

「来てくれたか、嬉しいよ。さあ、そこに座りたまえ」

指示通りにする。出されたコーヒーに口をつけて彼女の礼を聞いていた。ある程度聞いた後、私は何故化学実験室の噂が生まれたのか質問した。

「それについてなのだが…。実は私自身記憶を失っているんだ。

私はどうも一年生の時に事故に遭っているらしい。その時に大脳を損傷したとも聞いた。しかし三年生になった今、私は健康体で生存している。

私は一年生の頃は普通の生徒だったと教諭から聞かされたが、私は異常ではないと自覚している。それを主張すると化学実験室を明け渡してくれたよ。

それが2年生の終わり頃だから誰かが私の出入りを見てそういう噂を流したのだろう」

理解は出来た。この人は相当な苦勞をして今ここにいるのだと。大脳が損傷しても生存し、人格が大きく変わったという話は聞いたことがある。しかしそれは昔の記録だ。私は今日の前でその現象に遭遇している。驚きと光榮に飲み込まれそうだった。

「もうこんな時間か…。すこし話しすぎてしまったな。君といるといつい…な」

外はだいぶ暗くなってきた。まだ日は短いので早く帰らなければ。前のような危険にはお互い遭遇したくないだろう。

「さて、それでは私と共に帰るとしようか」

手を引かれ学校を出た。彼女は好機の目に晒されている。彼女からすれば今の自分が当たり前なのだろうが、周りからすれば異常なのだろう。

帰り道に通る湖を横目に見ながら深刻なトーンで彼女が話し始めた。

「君には私の助手になつて欲しい。私はこの世の全てを化学的に証明したいのだ。君は何かの部活に所属していないから断る理由もないと思うのだが、どうだろうか？」

痛いところを突かれて私は「はい」と言わざるを得なくなつてしまった。しかし私自身、本心から嫌でなかつた。

「よかつた。では明日から登校時間一時間前に化学実験室に来るように。勿論放課後もだ。君と過ごせるのが楽しみで仕方ないよ」

私はそれからずっと彼女の元に通い続けた。彼女の実験は有意義で、私達は私達なりの視点で世界の真実に近づいていた。一ヶ月ほど経つた頃、同級生の友人が話しかけてきた。

「お前最近どうしたんだよ。なんか変じゃないか？」

「そうよ。いつも放課後に湖でぼーつとしてるのに見掛けないと思つたら、大事故に遭つた先輩と仲良くしてるし」

実験のことを口外してはいけないし、何かカバーストーリーを考えるのも面倒だったので「たまたま知り合う機会があった」と適当に誤魔化した。

「そっか、俺もう行くわ。じゃあな」

「ねえ、君。あの先輩気をつけてね」

私はその理由を問うた。なぜ彼女を疑うのか。近くにいた私には分からなかったから。

「だってあの人、平気で暴力働くらしいし。事故に遭う前はそんなこと無かったらしいけどね」

「彼女はそんな人じゃない」と否定した。私はあの熱心で真面目な彼女を見ている。信じられない。

「私は忠告したからね」

同級生達は怪訝な表情でどこかへ行った。私自身も似たような顔をしていただろう。またあの部屋に足を運ぶ。

「今日は都合が悪いな…私の家に行こう。着いてきてくれるかな？」

渋々了承し、彼女に先導されて着いていく。今日ほど湖が濁って見えた日は無い。心癒されない風景を見ながら歩いた。

彼女の家はそれなりに大きくアメリカ映画の民家みたいだ。恐る恐る入っていくと玄関から整った様が見受けられる。促され、リビングの席に着く。

「両親は数ヶ月前から海外に出ていてね。私が珍しいから彼らは彼らで研究しているよ。だから、寛いで欲しい」

いつものようにコーヒーが出される。心做しか、いつもより美味しい気がしたのでそれを伝えると彼女は嬉しそうにしていた。

「家だところだわった機械を使えるから君にも飲ませてあげたかったのだよ。喜んでもらえて何よりだ」

自分の分も淹れ終わったらしく私と向き合うように座った。彼女は今まで見たことも無い眩しい笑顔をしていた。

「助手君。君は私という女がありながら他の女と話していた。どういうつもりか説明してくれるかな？」

彼女自身にあらぬ疑いがかかっていることを伝えた。何か楽しんで話していた訳では無いと証明するためにも。

「ハハハ……そんなことか！その通りだよ助手君！私は能無しの教諭を殴って言うことを聞かせたさ！」

私は慄然として席をたとうとしたが彼女の笑みは狂気を孕んで加速度的に口が歪ん

でいく。そこには少女の姿も、熱心な化学者の姿も無い。

「本当は今頃に眠って欲しかったが、元薬物中毒者には効き目が悪かったかな？」

迫り来る睡魔の中何とか口を開いてどこでそれを知ったのかを尋ねる。

「君のことならなんでも知ってる。かつて居た家では虐待され、幼少時代から薬物に手を出し、現在は施設で暮らしている。助手君は夜に施設を抜け出してあの湖に行ったり、雨が降ると門限を過ぎても帰ってこない問題児として認識されてるみたいだ。

だが安心したまえ、私は君の味方だ」

彼女の強烈な拳を腹に貰い、意識を保つことは不可能になった。理解が及ばないまま闇へ沈んでいく。私はどうなってしまう…？

「前の『私』に感謝しなくては。スポーツで鍛えられているお陰で助手君を眠らせることが出来たよ」

「そういえばアイツ帰ってこないですね」

「またあの湖じゃないか？」

「ですがもう数日ですよ？」

「前なんて一週間帰ってこなかったからな」

「うわ…最悪ですね…」

「頭おかしいからな。アイツの相手はしたくないよな」

「助手君ならもうここには帰ってこないよ。それと君達にはお仕置きが必要だな」

意識が戻ってきた。周りは暗い。起き上がるとカラカラと嫌な音がした。首の冷たい感触に触れるとそこには首輪とそこから伸びる鎖があった。何とかならないかと試みるが私の首が痛むだけだ。捕らえられてしまったようだ…。

「おはよう、助手君」

鎖が伸びる限り接近して彼女を睨みつける。しかしそれが気に障ったようで急所に蹴りを食らった。倒れて悶えていると腹に追撃が入る。あまりの痛みに叫ぶと喉輪で床に押し付けられる。

「少し黙っていたまえ」

呼吸が出来なくなつて藻掻くことすら出来なくなつてきた。再び意識を手放しそうになると自由にされて命を取り戻す。

「それじゃあ食事にしようか」

パンの一切れを渡されるが、違和感が凄まじい。なんと言うか、湿つていて変な匂いがするのだ。具体的に言うとな乾いた私の口と同じような臭いがする…。悪魔のような視線に見つめられながら私はそれに手をつけた。

咀嚼すると小麦と発酵バターの香りにのせて唾液の臭いが口いっぱい広がっては盛大に吐き戻した。すると頭を掴まれて嘔吐物の溜まりに叩きつけられた。

「吐くな！吐いたならそれも喰え！私の愛が受け入れられないのか！」

小麦と胃液と唾液の混ざったそれを舐めとる。吐いたものを喰らってはまた吐く。嫌悪感と恐怖で体が震え出し、無意識で喰べ始める。もう限界だ…。

数時間かけて嘔吐物の一滴も残らずに喰べ尽くした。すると彼女は濡れたタオルで私を拭いてくれた。心地よい涼しさに心が安らぐ。太陽の匂いのするタオルは荒みきった精神に安寧を齎してくれる。

「では、選ばせてあげよう。もし君が奴隷になると言うのなら私を睨むといい。しかし君には地獄を見てもらうがね。」

君が私の犬になるなら跪いて犬の鳴き真似をするんだ。そうするなら私は愛を持って君を飼ってあげよう」

私の心身は疲弊しきっていた。彼女が愛無しに私に私にどう接するのかはもう分かっている。私の体は少しでも負担のない道を選んだ。

「フフツ…ハハハハハ!!本当に嬉しいよ、助手君！いや、仔犬君！君は自分の意思で私の愛を受け取ってくれるのか！」

もうどうなってもいい。どうせ、学校にしようと施設にしよう和最悪な人生に変わり

はないのだから彼女に全てを委ねるのも悪くはないのだろう…。

甘い甘い

いつもの店だ。変わり種のドーナッツばかり売っている私の大好きな店。私は趣味で来ているのだが、私の相棒には必要不可欠なものである。私は自らの意思でパシられているわけだ。

『やあ、調子はどうだい？』

「やあ、アツシズ。今日は何にする？」

『ループ、バブルガム、スノーボールにしよう。後は…グレーズと適当に見繕ってほしい』

「任せとけ！」

結局4箱分になった。これ程ドーナッツを買うのは私くらいだ。帰り道には道行く人が私を見ているのだ。それもそうか。陰気な男がドーナッツ箱を抱えてとぼとぼ歩いているのだから。

「おつ、帰ってきたか。今日はなんだろうな」

『グレーズとオールドファッションらしい』

「まさかText assを買ってきてないだろうな？」

『残念ながらTex assだ。頑張つて食べるといい』

彼は異様に大きいグレースを頬張つた。美形の男がデカイドーナッツを抱えて頬を膨らませているなんて面白すぎるだろう。もし私が笑えたら大声で笑つてやるのだが。

『よく食べておけよ。君がいなければ始まらない』

「分かつてるさ。お前も食べておかないとスタミナ切れ起こすぞ。絶対に失敗できないんだ」

『そのためのバブルガムだ。食べたくななくても食べることになる、せつかくだから変わり種を食べておきたかつたんだよ。失敗しようと成功しようと死ぬかもしれない』

「お前は死なせないぞ。ドーナッツ配達員として魔法使い引退まで付き合ってもらおう」

私は既に自分の分を食べ終えたので最後に言いたいことを言うことにした。

『私とお前が逆だつたらどんなに良かったらうか』

「それはどういうことだ？」

『私はドーナッツを死ぬほど食べたい。君は自分の声がコンプレックスだ。魔法の代償として私は声を失つた。君は魔力の代わりにカロリーを消費する。これが逆ならどんなに良かったらう』

「本当にな……。だがそもそも奴がいなければ魔法使いにはならなかつたし、私達もいなかった。こんな悲観的な考えにもならなかつた。そのためにもやるしか無い」

彼は随分と食べるのが早いらしい。私が3つ食べるうちに10個食べ終わっていた。作戦の時間までまだ1時間ある。

『それにしても。私達が対勇者用の人外兵器だとは思わなかった。そして失敗作だったしな』

「成功してたら失わずに済んだこともあったのかもな」

『戦って、勝って、自由になって、ドーナツツたらふく食べたかったな』

「死ぬと決まったわけじゃないだろ？」

『いいや、死ぬさ。学園のファイルを見たら残念ながら私達が戦ってるうちに対消滅爆弾で空間ごと消し飛ばすんだと』

「魔法学園が科学に頼るのかよ」

『ドクトル・ブラウのブレイクスルーが話題のご時世だ。仕方ない』

「まあ、あんな女引連れて冒険してる害悪はのさばらしておけないし、命をかけてでも消す価値はあるか」

『そう信じよう。それしか出来ない』

戦場に出れば私たちは会話できない。私が声を出せばいいのだが、残念ながら叶わない。今回は敵の様子を伺いながら手話をする暇もない。一瞬の隙も与えずに勇者一行に地獄のような波状攻撃をしなくてはならない。私達が加熱しきったら爆弾で吹っ

飛ばす。勇者を始末し、私達人外を作り出したことも隠蔽できる。悔しいが、私達の負けだ。

終わりし世界の虐殺者

「死神が出たぞ！」

「死神だ！」

死神だ。核戦争によりこの世界は終わった。しかし人類は終わらなかった。数少なかれど生き残った人類は懸命に生きています。

「野蛮な雄め……さあ、死のうか」

「うわああああ!!」

ある時人間の営みを破壊する者が現れた。死神と名乗るその男はこの国中の男を殺して回っている。既に東京以外で男は滅んだと言っている。死神は凄まじい勢いで虐殺を行った。死神が現れてここまで僅か3ヶ月だ。彼は男なら子供だろうが乳児だろうが老人だろうが構わず殺し続けた。

私はこの居住地を離れ、東大和キャンプへ向かった。遠いが、ゴタゴタに紛れて逃げ、おそらく彼が最後に来るであろう東大和キャンプで最後の一人になり、彼が虐殺を繰り返す理由を聞きたいのだ。そして叶うなら彼にはトドメを……。

「どこかに隠れていませんかあ〜？計算より雄の数が三匹足りないんですけど〜？」

彼の言葉に耳を貸さず私は走った。この日の為に訓練はした。音を立てずに走り、心拍、呼吸に至るまで周囲と同化する。仲間の一人に見られていた、罪悪感を覚えながら私は走り続けた。

「一匹逃げましたねえ…。見ている人が居たら出てきて教えてくださいな。そうしたら雄でも命を助けてあげましょー」

「見た！俺が見た！アイツは東大和キャンプに逃げるつもりだ！」

「わあ、出てきてくれましたねえ。一匹逃がして、貴方がいて、あと一匹はどこにいますかあ？」

「頼む…あの子だけは見逃してくれ…！生まれてまだ3日なんだ…」

「なるほど…赤ちゃんですかあ…。逃がすわけないでしょ現に一匹に逃げられてるのにもう一匹見逃せとでも言うつもりでしょうか私の名前御存知ですか死神ですよ須らく死を齎す者ですよ分かってますか？」

「早くその子の所に案内してくれますか？はーやーくーしーてーくーだーさーいなー」

「どうしたそんなに息を切らして。立川の奴が急ぎの用か？」

「死神が…来る…！この国の男はもう終わりだ…！」

「なんだって!? 防衛体制を敷く!」

「無駄ですよお。私、もう来ちゃいましたあ〜」

「早すぎる…。私が逃げてから彼が追ってくるまで少なくとも5分はあつたはず…。最短の隠し通路も使ったというのにどうしてこうなつたんだ…。」

「私は東大和の生まれなのでここを最後にしたかつたんですよえ〜。それじゃ始めましょうかあ!!!」

彼は人間らしくからぬ速さで動き回つた。次の瞬間には周りにいた男達は爆発四散した。肉片が辺り一面に散らばつて私の体にもへばりついている。

「何をしたか気になりますかあ〜? ポケットグレネードですよお〜。ピンを抜いたグレネードをですえ〜ポケットの中に突っ込んであげるとですえ〜花火が出来るんですよお!?!?」

「なぜ私を狙わなかつたんだ」

「聞きたいことがあるつて顔に落書きされてますよお〜? しかも貴方は私が東大和を最後にすると分かつていたみたいですし…。話を聞いてあげようと思つたんですよ…。私は雄の始末が終わつたら行くので待つていてくださいなあ〜。私の行く場所お…。貴方の予想とガツチャンしたらお話し…。聞いてあげますからねえ〜」

そう言ううと遺された男達を首を捻つたり、内蔵を抉り出したり、バーナーで焼いたり、

首を切り落したり…。殺戮のオンパレードが始まった。死んでいく命を横目に見ながら考えつつ行動を始めた。

彼は最後はどこに行くだろうか。東大和市駅跡、旧日立航空機立川工場変電所跡、上北台駅跡、多摩湖取水塔跡…。候補が多すぎる。チャンスは一度きりだ。間違えれば彼は容赦なく私を殺しにくるだろう。

文明が失われてもなおその潤いを保つ湖の畔で私は立っていた。ただ死ぬか、意味を持つて死ぬかの2択に揺れながら。

『Donau so blau, Durch Tal und Au
Wogst ruhig du hin, Dich grünte unser Wien,
Dein silbernes Band knüpft Land an Land,
Und fröhliche Herzen schlagen
An deinem schünen Strand.』

「当たりだったか…」

「当たり前ですよ。おめでとうございます」

「じゃあ質問に答えてくれるんだな」

「いいですよ」

「どうしてこんなことをした。人類が窮地に立たされているというのに男をなぜ絶滅さ

せたんだ」

「私だつてこんなことはしたくなかつたんですけどねえ……。人類への報復ですよお……。私は二百年以上冷凍保存されてましてねえ、戦争が起こる前の人間なんですよお。目が覚めたら世界が終わつてましたあ……。そんな中でもお友達を作つたんですけどねえ、ある日突然女の子の友達が泣きながら私の家に来たんですよ。お友達は乱暴されたつて。」

「だから私はお友達を火炎瓶で殺してあげましたあ!!焼けてしまえば何も残らないでしょ?そして思つたんですよお……。」

「何年経つても変わらない猿は絶滅させてしまえばいいってねえ!!!そうすればお友達のように傷つく人はいなくなりますからねえ!!!」

「彼には理由があつた。正当な理由が。たつた1人の友達のためにここまでやつてのけた彼に敬意を表したい。私にはそんなこと出来やしない。」

「あとあとおく信じないかもしれないですけどおく神様も殺しちゃいましたあ!!!」
彼は来ているコートのの中から生首を2つ取り出した。顔は不自然に歪んでいて分からない。神の首なのだろうか。

「右がリリスで左がシオンですう。人間界に引き摺り込んで断頭したのもう復活出来ませーん」

「その2人が死ねば新しい命が生まれないじゃないか…」

「何が悪いんですかあ?!?!これ以上この世界にゴミはいりませんよねえ?!?!私はゴミの発生源を絶つただけですよお!!」

正気じゃない…。しかし思いの力だけで神を殺してみせるなど、今の人間にはできないだろう。他者を心から思いやることの出来ない今の人間には。

「あ、外国に行けば誰かいるかもとか思いましたよねえ…?ざんねーん。外国の雄も一匹残らず始末してあるのでこの世界の雄は私と貴方だけですよお」

「私を殺すのか?」

「勿論そうしたいんですけどお…。貴方には最後の人類が死ぬまで一緒にいてもらいましょうかあ…。最後の最後にダーティ・ボムを起動してこの世界に二度と生命が生きられないようにしたいのでえ、お手伝いがいるんですよ…」

「分かった…やるよ」

「ついに終わりましたねえ」

「あとは私達だけか…」

「言い残したことはありませんかあ…?」

「何も」

「さよーならー」

「終わった。私の報復が……。これで私も解放される……。天国で君が浮かばれていることを祈るよ……。」

血に染められたこの身体、最後の時には清らかなる湖に抱かれ、永遠の罪と共に私を沈めよ……」

凄まじい爆発音があちこちで聞こえる。放射線物質が世界中にばら撒かれていく。二度と生物の現れない荒野になっていく。私は最期の時に道化を演じるのを辞め、自分で自分の罪にとどめを刺した。